

ガリラヤ湖上における二つの奇蹟に見る

「御国の福音」のヴィジョン

ベレーシート

●第三回の「ヘブル・ミドゥラーシュ」例会で、「五千人の給食の奇蹟と四千人の給食の奇蹟」を取り上げました。なぜ似たような奇蹟を福音書は記しているのか。しかも五千人の給食が先で、四千人の給食の奇蹟が後に記されているのはどういうことだろうかという問いかけから、先の五千人の奇蹟はモーセの幕屋における神の食卓にあずかることであり、四千人は千年王国におけるメシア王国、およびにその後に来る永遠の御国における新しいエルサレムにおいて主の食卓にあずかることを啓示した「御国の福音」のヴィジョンであることを取り上げました。今回も同じく、福音書からイエシュアの奇蹟を取り上げたいと思います。

●イエシュアは「御国の福音」を告げ知らせるために御父から遣わされました。御子イエシュアの語られた「たとえ話」や「奇しいわざ」は、すべて、「御国の福音」についてのヴィジョンであり、そこに隠されている深いメッセージを伝えようとする手段なのです。ですから、その視点から「たとえ」と「奇蹟」は解釈されなければなりません。聖書は、イエシュアが単に奇蹟的力をもった方であるとか、私たち人間が困難に出会って絶望的状况に陥っている時に超自然的な力をもって助けてくださる方であるということをお教えしようとしているものではないということを念頭に置きながら、今回は、**ガリラヤ湖上で起こった二つの奇蹟**をミドゥラーシュしたいと思います。ちなみに、マルコの福音書では以下のように、三つの領域においてイエシュアがなされた18の「奇蹟」が記されています。

(1) 自然界における奇蹟・・自然界の法則を超越した奇蹟

- ①「湖上の突風」(4:35~41)、②「五千人の給食」(6:33~44)、③「湖上歩行」(6:45~52)
- ④「四千人の給食」(8:1~9)、⑤「枯れたいちじくの木」(11:12~14)

(2) 病気の癒しの奇蹟・・あわれみのゆえに病気を癒す奇蹟

- ①シモンの姑の熱病(1:29~39)、②「ツアラートに冒された人」(1:40~45)
- ③「中風の人」(2:1~12)、④「片手のなえた人」(3:1~6)、⑤「死んだヤイロの娘」(5:21~43)
- ⑥「長血の女」(5:25~34)、⑦「耳が聞こえず、口のきけない人」(7:31~37)
- ⑧「目の見えない人」(8:22~26)、⑨「目の見えないバルテマイ」(10:46~52)

(3) 悪霊からの解放の奇蹟・・悪霊の力による束縛から人々を解放した奇蹟

- ①汚れた霊につかれた人(1:21~28)、②レギオンにつかれた人(5:1~20)
- ③「ツロ・フェニキヤの女の娘」、④「おしの霊につかれた息子」(9:14~29)



●今回取り上げる**ガリラヤ湖上で起こった二つの奇蹟**を、

「湖上の突風を静められたイエシュア」(4:35~41)と「湖上を歩いて弟子たちに近づかれたイエシュア」(6:45~52)というタイトルでまとめてみたいと思います。

1. 湖上での突風を静められたイエシュア

(1) 聖書のテキスト

【新改訳改訂第3版】マルコの福音書 4章 35～41節

35 さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、「さあ、向こう岸へ渡ろう」と言われた。

36 そこで弟子たちは、群衆をあとに残し、舟に乗っておられるままで、イエスをお連れした。他の舟もイエスについて行った。

37 すると、激しい突風が起り、舟は波をかぶって、水でいっぱいになった。

38 ところがイエスだけは、とものほうで、枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして言った。

「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われぬのですか。」

39 イエスは起き上がって、風をしっかりとつけ、湖に「黙れ、静まれ」と言われた。すると風はやみ、大なぎになった。

40 イエスは彼らに言われた。「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことですか。」

41 彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った。

「風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう。」

●ここでは講解説教をするわけではありませんので、細かな注解はせず、「御国の福音」の重要な事柄を示唆する語彙にのみ注目しながら、この出来事が何を伝えようとしているのかを考えてみたいと思います。イエシュアが「たとえ」で語られるのは、人々に理解しやすくするためではなく、その真意を尋ね求めることがなければ、決して知り得ない神の真意の伝達方法です。それは「たとえ話」のみならず、「奇蹟」にも同様に言えることなのです。つまり、ただ目に見える事柄にのみ留まっているならば、その奇蹟の真意は悟れないということです。しかもその真意とは私たちへの教訓的なものではなく、「御国の福音」の真理の啓示なのです。

(2) イエスの行為－「眠る」「起き上がる」－に見る「御国の福音」のヴィジョン

●この箇所の状況として特記すべき点は、「向こう岸へ渡ろう」というイエシュアの呼びかけによって、弟子たちと舟に乗り込んでそこへ向かう途中、突然、激しい突風が起り、舟は波をかぶって、水でいっぱいになり、今にも沈みそうになどという危機的な時に、イエシュアだけがとものほうで枕をして「眠っておられた」ということです。一見、非常識で不釣り合いな部分が実は重要です。ここから、神への信頼はどんな危機的な状況の中に置かれたとしても、平安を得ることができるというメッセージを引き出すことは可能です。しかし私は、イエシュアが突風の中で「眠っていた」ことと、「起き上がった」ことが意味することに注目したいと思います。

マルコはこの出来事を記したのは、信仰者に突然襲う危機の対応をイエシュアの信仰から学ぶようにということであったのかどうかです。イエシュアの周囲に起こっていることは、私たち人間が共通に経験するようなレベルに合わせて、教訓的なことを教えるためではありません。むしろ、「御国の福音」にある重要なメッセージを奇蹟という形で表現しようとしていると考えるならば、「眠っていた」イエシュアが「起き上がる」ことで嵐が静まったという事実を考える必要があります。

●「眠っている」ということばの真意を知るためには、聖書を通して知る必要があります。そのヒントがあります。それはマルコの福音書 5章 21～24節と 35～43節に、会堂管理者のヤイロの娘(12歳)のいやしの記事が

あります。父ヤイロは自分の娘が死にかけていたので必死にイエシュアに助けを求めます。しかしその甲斐なく、娘は死んだという知らせが家から父に届きます。ヤイロの家では人々が取り乱して、大声で泣いたり、わめいたりしていました。まさに、波をかぶって今にも沈みそうな舟の中にいる弟子たちのようです。イエシュアはヤイロの家に集まった人々に、「子どもは死んだのではない。眠っているのです。」と言います。ところがそれを聞いた人々はイエシュアをあざ笑いました。イエシュアは、娘の両親と3人の弟子たち(ペテロ、ヤコブ、ヨハネの3人)だけを伴って、娘のいる部屋に入り、その娘の手を取って「タリタ・クミ」(訳して言えば、「少女よ。あなたに言う。起きなさい。」という意味である)と言われたのです。娘はすぐさま歩き回り、歩き始めたマルコは記しています。

●ヤイロの娘は確かに死んだのです。それをイエシュアは「眠っている」と言われました。そして、その娘は主が「起きなさい(起き上りなさい)」ということばで、すぐさま起き上がったのです。これは湖上で眠っていたイエシュアが起き上がることで風はやみ、大なぎになったことと構造が全く同じです。「湖上での出来事」と「ヤイロの家の出来事」は同じメッセージを持っていると言えるのです。つまり、前者の奇蹟が意味することを、後者の奇蹟がそれを補強する形で説き明かされています。



●湖上での出来事も、ヤイロの娘の出来事も、実は、「御国の福音」の中核的な出来事である「死と復活」を伝えようとしていると理解できるのです。旧約聖書では、神に敵対する勢力を自然の比喻を用いて表わすことがしばしばです。ここでの舞台設定は「湖」です。ヘブル語では「湖」も「海」も「大きな川」も、すべて「ヤーム」(יָם)という語彙で表わします。しかもその「ヤーム」は、悪魔的な力、混沌(カオス)、闇などを象徴します。まさに湖上に突風が起り、舟が波をかぶっているという状況は、神に敵対する勢力のしるしと言えます。

●弟子たちがイエシュアを起こして、「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、なんとも思われませんか。」と訴えています。「死にそうでも」と訳されたギリシア語は「アポツリユミ」(ἀπόλλυμι)で、「滅びる」という意味です。まさに人を滅びに至らせる敵の勢力を叱りつけ、風を静めて、海を大なぎにすることのできる方は、眠りから起き上がったイエシュアにしかできないことなのだという信仰告白が、ここに込められていると言えます。ちなみに、「静まれ」と訳されたギリシア語の「シオーパオー」(σιωπάω)は、動物の口にくつこをはめて黙らせ、危害を加えない状態にするという意味のことばです。

●イエシュアがヤイロの娘を「死んだのではなく、眠っているのです」と言ったとき、人々はイエシュアをあざ笑いました。これとは全く逆に、イエシュアがベタニヤのラザロを眠りからさましに行く言ったとき、それを聞いた弟子たちは、「主よ。眠っているのです。彼は助かるでしょう。」と言いました。しかしイエシュアははっきりと彼らに言いました。「ラザロは死んだのです。」と。神が人々に隠された真理を伝えようとするときには、いつの時代でも人々からあざ笑われたり、正しく理解されなかったりすることが多いのです。

●マルコの「眠っている」と訳されたギリシア語は「カセウドー」(καθεύδω)で、そのヘブル語訳は「ヤーシエーン」(יָשַׁן)。「起き上がる」と訳されたギリシア語は「エゲイロー」(ἐγείρω)です。そのヘブル語訳は「ク

ーム) (𐤇𐤐𐤑)。特に、「エゲイロー」にはさまざまな接頭語がついて用いられますが、基本的な意味においては変わりません。ただしこの「エゲイロー」は「起こす」が能動態で、「起き上がる」は受動態となりますので、日本語の感覚とは異なります。いずれにしても、「エゲイロー」は新約における復活用語なのです。眠っている者が「目を覚ます、起き上がる」ということは、復活を告知した聖書的表現なのです。主にある者たち(その時、眠っている者たち=死んだ者たち)は、やがてキリストの空中再臨によって眠りから呼び覚まされ、一瞬のうちに空中に引き上げられ(携挙され)ます。また大患難で殉教した者たちはキリストの地上再臨の時によみがえります。そのような「御国の福音」がイエシュアのなしたひとつ一つの行為の中に秘められて表現されているのです。

2. 湖上を歩いて弟子たちに近づかれたイエシュア

(1) 聖書のテキスト

【新改訳改訂第3版】マルコの福音書 6章 45～53節

45 それからすぐに、イエスは弟子たちを強いて舟に乗り込ませ、先に向こう岸のベツサイダに行かせ、ご自分は、その間に群衆を解散させておられた。

46 それから、群衆に別れ、祈るために、そこを去って山のほうに向かわれた。

47 夕方になったころ、舟は湖の真ん中に出ており、イエスだけが陸地におられた。

48 イエスは、弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になり、

夜中の三時ごろ、湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれたが、そのままそばを通り過ぎようとおつもりであった。

49 しかし、弟子たちは、イエスが湖の上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、叫び声をあげた。

50 というのは、みなイエスを見ておびえてしまったからである。しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われた。

51 そして舟に乗り込まれると、風がやんだ。彼らの心中の驚きは非常なものであった。

52 というのは、彼らはまだパンのことから悟るところがなく、その心は堅く閉じていたからである。

53 彼らは湖を渡って、ゲネサレの地に着き、舟をつないだ。



(2) 「通り過ぎる」という動詞のヘブル的意味

●この箇所の中で、腑に落ちない不自然な箇所といえどどこでしょうか。それは、68節ではないかと思います。

6:48 イエスは、弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になり、夜中の三時ごろ、湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれたが、**そのままそばを通り過ぎようとおつもりであった。**

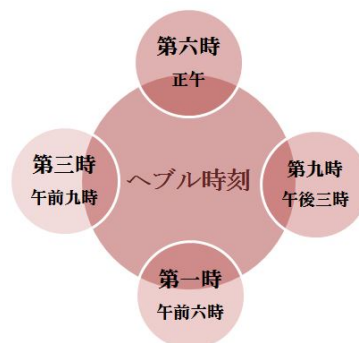
特に、太字の部分は不思議な箇所です。違和感を覚えますか。つまり、「通り過ぎる」という部分です。イエシュアは「弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になり、夜中の三時ごろ、湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれた」にもかかわらず、「通り過ぎる」というのは奇妙な話ではないでしょうか。

●弟子たちはイエシュアに強いて舟にさせられて、夕暮れ時に岸を離れた小舟は、夜が更けるにつれて、荒波に吹きさらされます。こんな時に主がそばにおられないという状況でした。それは恐怖と不安の数時間であったと

HEBREW MIDRASH No.5

ろうと思います。でも、イエシュアはその状況をご存じでした。ちなみに、「夜中の三時頃」はヘブル時刻では「第四の夜回りの頃」（午前 3～6 時）とあります。つまり、午前三時頃と言えば、夜明け前の最も暗い時刻です。しかも、夜通し逆風に（「向かい風に」）悩んだ弟子たちは、このとき限界状況にあったと思われます。

●ヘブル時刻は朝から夕方までの 12 時間を上記のように表わします。夜間の時刻は午後 6～9 時までを「第一の夜回り」、午後 9 時から真夜中の午前 0 時までを「第二の夜回り」、午前 0 時から 3 時までを「第三の夜回り」、そして午前 3 時から 6 時までを「第四の夜回り」と言っていました。



●イエシュアは弟子たちを助けに近づいて来られたのに、なぜ、通り過ぎてしまおうとされたのでしょうか。その答えの一つに、イエシュアは弟子たちが主を呼び求めるのを待っておられたのだという解釈です。主は何事も押し付けられない。もし主を呼び求める者がいれば、その人に答えようとして待っておられる。つまり、主は弟子たちが信仰に目覚めて主を呼ぶのを待っておられたという解釈です。とすれば、主を呼び求めなければ主はそのままだ通り過ぎて行ってしまうということになります。果たして、そうしたことを教えようとして、マルコはこの奇蹟の記事を書く必要があったのでしょうか。とすれば、テキストにある「強いて」ということばの意味の整合性が取れません。イエシュアはある特別な意図があって弟子たちだけを舟に乗せたのです。ちなみに、「強いて・・・させる」というギリシア語は「アナグカゾー」（ἀναγκάζω）で、新約では 9 回使われていますが、福音書ではマルコ 6 章 45 節とその並行箇所のマタイ 14 章 22 節です。ルカではたとえ話の中に 1 度使用されています。イエシュアの宣教活動において、弟子たちに「強いて・・・をさせた」という表現はここ 1 回限りです。つまり、とても珍しいのです。このテキストを読む限り、弟子たちが助けを求めて主の御名を呼び求めているようには見えません。むしろ、「幽霊だ」と言って叫び声を上げて驚いている始末です。そのときに主の方から、すぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われているのです。

●確かに、「イエシュアは弟子たちが主を呼び求めるのを待っておられる」というメッセージは、「主の大いなる輝かしい日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる。しかし、主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」(使徒 2:20～21、ローマ 10:13)―これはヨエル 2 章 28～32 節からの引用(LXX 訳)―とありますから、思想自体は間違っていないと思います。しかしここでのマルコの箇所は、「イエシュアは弟子たちに呼び求められるのを待っておられた」という解釈は妥当ではないように思えます。

●では、この出来事が伝えようとしている要点は何なのでしょう。ちなみに、この記事は並行記事であるマタイの福音書とほぼ同じですが、マタイにはペテロの湖上歩行の記事が挿入されています。つまり、マルコと似ていますが、別の意図を含んだものとして扱われていると考えられます。マルコがこの出来事を書かなければならなかった必然性はどこにあるのでしょうか。それを探るために、マルコしか使っていない部分に注目してみたいと思います。それは 48 節、「イエシュアは、弟子たちが、向かい風のために漕ぎあぐねているのをご覧になり、夜中の三時ごろ、湖の上を歩いて、彼らに近づいて行かれたが、そのままそばを通り過ぎようとおつもりであった。」の中の「通り過ぎる」という表現です。

HEBREW MIDRASH No.5

ἔρχεται πρὸς αὐτοὺς περιπατῶν ἐπὶ τῆς θαλάσσης: καὶ ἤθελεν παρελθεῖν αὐτούς.

やって来た のところへ 彼ら 歩きながら ~上を 湖の そして ~ようとした **通り過ぎる** 彼らを

ἔρχομαι

περιπατέω

θέλω

παρέρχομαι

動/直現中 3 単

分/現能 3 単

動/直未完能 3 単 不定/アオ能

●「通り過ぎる」と訳されたギリシア語は「パレルコマイ」(παρέρχομαι)ですが、ヘブル語では「アーヴァル」(אָוַר)という動詞が使われています。この「アーヴァル」は、「通り過ぎる」の他に、「渡る」「越える」「除く」「追い払う」という意味もあります。余談ですが、この動詞から、「ヘブル人」とは「(川を)渡ってきた者」(「イヴリー」יְבֻרִי)という意味になります(創世記 14:13)。

●さて、この「通り過ぎる」と訳された言葉をコンコルダンスの中から、主体が主なる神である場合に限って、調べてみると、以下の四つの箇所を見出すことができます。

① 初出箇所は、【新改訳改訂第3版】創世記 15 章 17 節

さて、日は沈み、暗やみになったとき、そのとき、煙の立つかまどと、燃えているたいまつが、あの切り裂かれたものの間を通り過ぎた。

●ここは、主とアブラムとが契約を結んだ「たいまつ契約」と呼ばれている箇所です。ただしアブラムが深い眠りに落ちていた時に、主が一方向的に結んだ契約です。「かまど」や「たいまつ」は主の臨在の象徴ですが、それが切り裂かれたものの間を「通り過ぎた」と記されています。

② 【新改訳改訂第3版】出エジプト記 33 章 22 節

わたしの栄光が通り過ぎるときには、わたしはあなたを岩の裂け目に入れ、わたしが通り過ぎるまで、この手であなたをおおっておこう。

③ 【新改訳改訂第3版】出エジプト記 34 章 6 節

【主】は彼の前を通り過ぎるとき、宣言された。「【主】、【主】は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦す者、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。

●②では、シナイ山で主がモーセの前に現われたことを示しています。つまり、主が顕現されたのです。栄光に満ちた主の御顔を見ることができないように、主ご自身の手がモーセをおおってはいますが、そこに主が顕現しているのです。「通過して行った」ということではありません。現に③では、主がモーセの前で語っておられるからです。

④ 【新改訳改訂第3版】I 列王記 19 章 11 節

【主】は仰せられた。「外に出て、山の上で【主】の前に立て。」すると、そのとき、【主】が通り過ぎられ、【主】の前で、激しい大風が山々を裂き、岩々を砕いた。しかし、風の中に【主】はおられなかった。風のあとに地震が起こったが、地震の中にも【主】はおられなかった。

⑤ 【新改訳改訂第3版】アモス書 5 章 17 節

17 すべてのぶどう畑に嘆きが起こる。それは、わたしがあなたがたの中を通り過ぎるからだ」と【主】は仰せられる。

●以上、五箇所にある「通り過ぎる」ということばは、まずアブラムに対して、次はモーセに、その次はエリヤに、そして最後はユダの民に対してです。これらのテキストは、神である主が彼らの前に顕現したことを示しています。つまり、「通り過ぎる」とは、その場を「通過する、通り過ぎて行く、」という意味ではなく、神の顕現を表わす旧約的な表現であるということです。しかもその時、必ず、主のことばが語られているということが重要です。それは、今回の湖上でのイエシュアの場合にも言えることです。つまり、漕ぎあぐねている弟子たちに主が顕現されたのです。（雨宮 慧著「なぜ聖書は奇跡物語を語るのか」2011.教友社発行）を参照のこと。

(3) 「わたしだ」(「エゴー・エイミ」 ἐγώ εἰμι、**אֲנִי הֵינְאִי**)

●弟子たちが湖上を歩くイエシュアの姿を見た時、彼らはどのような反応を示したのでしょうか。彼らはイエシュアを「幽霊だと思い、叫び声をあげた」のです。「叫び声を上げる」とは「大声で絶叫する」ことです。ギリシア語は「アナクラゾー」(ἀνακράζω)で、新約では5回使われています。それは悪霊に憑かれた人がなりふりかまわずに大声で叫ぶ声であり(マルコ 1:23、ルカ 4:33, 8:28)、イエシュアを十字架につけようとした群衆が声をそろえて、「この人を除け。バラバを釈放しろ」(ルカ 23:18)と叫んだ叫びです。これと同じような叫びを弟子たちがしたということです。その恐れおびえる姿が尋常ではなかったことを示唆しています。

●それに対して、イエシュアはすかさず彼らに声をかけました。「**しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない**」と(50節)。このフレーズこそ、まさに旧約的な主の顕現を示すヘブル的表現です。「**しっかりしなさい。**」はヘブル語の「ハーザク」(**חָזַק**)の命令形で、旧約でしばしば語られる「強くあれ、雄々しくあれ」の前半の部分の動詞、「強くあれ、勇気を出せ、しっかりせよ」という意味です。ちなみに、「強くあれ」を新共同訳は「安心しなさい」と訳しています。「しっかりしなさい」という励ましのことばは、弱り果ててしまったうつ病の人には絶対に言うてはならない一言ですが、弟子たちの場合は「幽霊を見た」恐れと驚きですから全く問題ありません。彼らに対する主の一喝は、「**しっかりしろ!!!**」です。しかし、それ以上に重要な言葉が次に来ます。それは「**わたしだ**」というフレーズです。そこでのヘブル語訳は「**アニー・フー**」(**אֲנִי הוּא**)と訳されていますが、「**わたしだ**」のギリシア語は「エゴー・エイミ」(ἐγώ εἰμι)です。これは重要な神の御名を表わす語彙です。

●ヘブル語では「エフイエ」(**אֲנִי הֵינְאִי**)ですが、LXX 訳はこれを「エゴー・エイミ」と訳したのです。モーセがエジプトに遣わされるという召しを受けた時、彼は神である方の名前を問いました。すると神は「わたしはある」(「エフイエ・アシエル・エフイエ」**אֲנִי הֵינְאִי אֲשֶׁר אֲנִי הֵינְאִי**)と言われたのです(出 3:14)。名前としては不思議な名前ですが、この名前が意味することはきわめて深淵です。「エフイエ」(**אֲנִי הֵינְאִי**)は、動詞「ハーヤー」(**הֵינְאִי**)の1人称単数未完了形です。**אֲשֶׁר**は関係(代名)詞。二つの語彙からなる名前ですが、これをどのように訳すのかは聖書によって微妙に異なります。以下は **אֲנִי הֵינְאִי אֲשֶׁר אֲנִי הֵינְאִי**の翻訳についてです。

新改訳	わたしは、『わたしはある。』という者である。
新共同訳	わたしはある。わたしはあるという者だ。
口語訳	わたしは有って有る者。

HEBREW MIDRASH No.5

岩波訳	わたしはなる。わたしがなるものだ。
文語訳	我は有て在る者なり
関根訳	わたしはあらんとしてある者である。
フランシスコ会訳	わたしはある〔エーイエ〕ものである。
新世界訳	わたしは自分になるところのものとなる。
KJV	I am that I am
NASB, NIV, NKJV	I am who I am
NJB	I am he who is
Moffatt 訳	I will be what I am
LXX 訳	εγω ειμι ο ων

●「エゴー・エイミ」は、常に永遠性をもった神の自己啓示です。黙示録 1 章 4 節もそのヒントになります。「常にいまし、昔いまし、後に来られる方」(Him who is, and who was, and Who is to come)。もう一つ、ヘブル人への手紙 13 章 8 節「イエス・キリストは、きのうもきょうも、いつまでも同じです。」もヒントになります。西満師は「神の自存性、独一性、永遠性を表わすのに、これほど適切なことばはないであろう」と述べています。鍋谷堯爾師も『『ハーヤー』の未完了形に注目し、私たちの前に置かれている『未完了』の領域が神の主権のもとにおかれ、契約に忠実な神が、人間の側では予測不可能な将来を引き受けてくださっていることを示す神の名であると考えることができます。』と述べています(「創世記を味わう 1」、いのちのことば社、173 頁)。

●いずれにしても、神のご計画のマスタープランを貫いているのは、この神の名前です。私たちはやがてこの名前を持つ永遠なる方と目と目を合わせて会うことになるのです。それゆえ、「**しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない**」なのです。

●ところで、旧約のハバクク書 3 章は「ハバククの詩篇」と呼ばれていますが、その内容は「終わりの日」に起こる出来事が預言されています。その中に、「彼らは・私をほしいままに追い散らそうと荒れ狂います。」(3:14) ということばがあります。「彼ら」とは神に敵対する者たちで、「私」とはハバククに代表される神の民のことだと思えることができます。神が「彼ら」の頭に矢を刺し通されることで、「彼ら」は神の民を絶滅しようと「荒れ狂います」。しかし 3 章 15 節には、「**あなたは、あなたの馬で海を踏みつけ**」とあります。「馬」は神の力を象徴するものです。「海」は常に神に敵対する者たちの勢力を意味します。ですから、その海が「荒れ狂う」とは、神に敵対する勢力が最後のあがきをすることを意味しています。そしてその「海」を主が力をもって「踏みつける」のです。口語訳はこの箇所を「海と大水のさかまくところを踏みつけられた」と訳しています。「踏みつける」と訳されたヘブル語は「ダーラフ」(דָּרַף)で、「歩く」だけでなく、「**歩いて渡る**」という意味もあるのです。まさに、それは「イエシュアが湖上を歩くシーン」と重なります。

●神に敵対する勢力が「怒り狂う」ことを、ハバクク書 3 章では自然界の「海」や「湖」が荒れることで表わしています。もしキリストの地上再臨が「仮庵の祭り」の満月の時だとすると、海は最も荒れているはずですが。しかも、今回のマルコの出来事でイエシュアが登場するのは午前三時頃です。それは夜明け前の最も暗い時刻で

す。その時にイエシュアが弟子たちの所に近づき、神としての顕現を表わしたように、神の「定められた時」である「終わりの日」に、海の嵐を静めることのできる方として、イエシュアが必ずそこに顕現されることを私たちに伝えようとしているのではないのでしょうか。その時にこそ、イエシュアが語られた「**しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない**」ということばは、神の民(イスラエル)にとってどんなに大きな慰めを与えることでしょうか。

(4) この出来事の預言的な意味

●この出来事は、「御国の福音」の視点で見ると、イエシュアが湖上を歩いたという奇蹟ではなく、むしろ、荒れる湖の上を歩いて弟子たちに近づき、神として顕現されたことのほうが重要なのです。これまですでに述べたように、「終わりの日」には「海」は必ず「荒れる」ということを念頭に置かなければなりません。

●ドイツにユルゲン・モルトマンという神学者がおります。彼は「希望の神学」を提唱したことで知られていますが、その神学は「聖書の破滅の神学」です。破滅の後に以前よりもっとすばらしい世界が来るとする神学です。つまり、**終わりの中に、新しい始まりがあるとする希望の終末論**なのです。それを裏づける「型」が、聖書の中に以下のように示されています。

- | | |
|---|--|
| { | ①洪水によるさばきとノアとその家族からの新しい出発 |
| | ②ユダのバビロンの捕囚の憂き目と神のトラーによる新しい神の民の回復 |
| | ③イエシュアの十字架の死と復活 |
| | ④「終わりの日」の反キリストによる大患難とイエシュアの地上再臨によるメシア王国の実現 |
| | ⑤白い御座における最後の審判と天から降りてくる新しい聖なる都エルサレムの出現 |

●モルトマン自身も第二次世界大戦の痛い経験を通して、個人的にもこの「型」を裏付ける経験をされた方です。ですから、彼の「希望の神学」は決して単なる机上の神学ではない強みを持っています。そのモルトマンの破滅と希望の神学は、聖書的であり、預言者ハバククの最後の預言と似ています。

【新改訳改訂第3版】ハバクク書 3章 17~19節

17 **そのとき**、いちじくの木は花を咲かせず、
ぶどうの木は実をみのらせず、
オリーブの木も実りがなく、
畑は食物を出さない。
羊は囲いから絶え、
牛は牛舎にいなくなる。

18 **しかし**、私は【主】にあって喜び勇み、
私の救いの神にあって喜ぼう。
19 私の主、神は、私の力。
私の足を雌鹿のようにし、
私に高い所を歩ませる